

# 「いじめ」

## 詩編 13編

日本キリスト改革派 国立聖書教会牧師・本学講師 野島 邦夫

今週の全学礼拝の奨励は、「苦難の中で―御言葉に聞く」という全体テーマを持っています。今日の奨励を依頼された時、私の頭にはすぐさま「いじめ」が思い浮かびました。「人が生きていて、外から身にふりかかる苦しみ」を「苦難」というなら、現代の深刻な苦難が「いじめ」でしょう。学校の生徒たちにとっては「最も深刻な」苦難でしょう。もちろん、「会社」でもいじめはありますし、年配の方々の中にはかつて戦争中に軍隊でいじめられた経験を持つ方もおられるでしょう。しかしここでは、学生の皆様に身近な「学校内のいじめ」を主に考えます。

被害者に深刻な影響をもたらす(時には自殺という)学校内のいじめは過去にもあったにちがいないませんが、特に最近マスコミが詳細に報道することもあり、私たちも身近に感じるようになりました。「身近」どころではありません。先週、この大学で私が担当する二つの授業クラスの出席者に「いじめの体験の有無」を聞きました。その結果、きわめて深刻なものから、客観的に「いじめ」かどうかわからないが少なくとも自分には「いじめ」だと感じられたという程度のものまで含めて：一つのクラスでは32名中10名(約31%)が、もう一つのクラスでは17名中8名(約47%)が「経験した」という答えでした。そして、恐れていた通り、その内容については「思い出したくない」とか「トラウマになっている」などと答える人もいて、被害者に現在まで深刻な悪影響を及ぼしていることがわかります。現代若年層のかなりの人たちが受けている「苦難」である「いじめ」、これを解決するため私たちは何をすべきでしょうか・何ができるでしょうか？キリスト教・聖書は解決への道を教えてくれるのでしょうか？

そもそも「いじめ」とは何でしょうか？ふつう「(弱い立場にある者に)わざと苦痛を与えて、快感を味わうこと」などと説明されます。しかし、これでは何か抜け落ちます。例えば「クラスの暴れん坊ジャイアンが、のび太がしずかちゃんと仲良く話をしているのを見て、決闘を申し込む。」どちらが勝つのか、初めからわかっています。が、このような暴力はふつういじめとは言いません。そうではなく、「中学二年生のA君を、同級生のグループの生徒たちは毎日買い出しをさせた。それは時には一日五、六回になった。彼らは、A君がエレベーターを使うのを禁止し、マンションの8階や10階から、階段を使って使い走りさせた。カバンを一度に5、6個持たせた。授業中に買い出しをさせ、それが教員に見つかって注意されると、A君に殴る蹴るの暴行を加えた。」いじめはエスカレートして、「葬式ごっこ」をするまでになり、ついにA君は首をつって自殺する<sup>1</sup>―これは実際の事件で、こういうのが「い

---

<sup>1</sup> 内藤朝雄「いじめの構造」(講談社現代新書)、p. 22ff., 84ff。

じめ」です。私が、被害者から聞いたり、いじめについて書いた本を読んで、いじめというものの特徴だと思ふことを思いつくままに挙げてみます：

① 被害者がいじめを受ける「きっかけ・動機」はあるが「原因」は見当たらない(少なくとも本人に心当たりはない)。様々な意味で「弱さ」をもつ者が被害者になることが多いが、それが根本原因というわけではない。

② 被害者と加害者が一対一の場合もあるが、大抵は一対多数(クラスの中のいじめなど)。そして、いずれの場合でも加害者(たち)は「上に立つ強者」、被害者は「下の弱者」という、何か抗いがたい全体の「空気」になっている。

③ いじめという状況の中から、被害者は抜け出せない：学校のクラスのような決められた閉鎖集団だから変えにくいということもあるが、全体がそのような「空気」であり、被害者は「抜け出す」意欲も思いも奪われる(蛇に睨まれたカエルのように)

④ 被害者は身体的精神的に苦しみ、時に自殺に至ることもあるが、加害者側はそのことに対して罪悪感を持たない。社会的な倫理とか人間としての道徳はここでは意味を持たない。

⑤ いじめの対象は誰でもいい：例えば被害者が自殺していなくなっても、代わりに別の誰かが対象になる。

...

まだまだ挙げることはできますが、そうしたところでいじめの本質はなかなか見えて来ません。ましてや、その解決など見つかりません。ただ、被害者の側にとって最も辛いのは、私の見るところ、「ひどいいじめにあっても、逃れられない、一人っきりだ、これしか世界は無い」という深い閉塞感に閉じ込められていることだと思います。だから、「外に」助けを求めることなど思いも及ばないし、その気力も生まれません。

そんな思いで目を聖書に移すとドキッとさせられます。他でもない、イエス・キリストの生涯が「苦難の生涯」だからです。象徴的なことに、その中でイエスご自身、「人々は理由もなく私を憎んだ」(ヨハネ 15,25 < 詩 35,19: 69,5)と言われました。つまり一種の「いじめ」状態です。イエスの「苦難」は様々な見方ができますが、「いじめ」とも見ることができます。イエスイじめの加害者は主に、当時のユダヤの宗教的・社会的指導者層(=旧約聖書の専門家たち(律法学者)・ファリサイ派と呼ばれる人々)です。さらに一般民衆も加担するのですが、その全体が「ユダヤ社会」をつくっています。このユダヤ社会はユダヤ教に基づくもので、政治的にはローマ帝国の支配下にあるのですが、その中できわめて強い閉鎖性をもっています。その中で、一庶民であるイエスが、すばらしい人格と説教と奇跡によって人望を集め目立ち始めた時、特に宗教的権威である律法学者ファリサイ派の人々より教

えにおいて尊敬のされ方において前面に出始めた時、彼らは「どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。」(マタイ 12,14)この殺意は、加害者の側からすれば、面目をつぶされ地位と権威の失墜を恐れてのもので、このはっきりとした動機はあるのですが、ユダヤ教の根本的教えに照らせばイエスの方が「正しい」。ですから、被害者イエスの側からは、正当にも、「理由もなく」ということになります。この双方の対立は、昂じて、遂にイエス殺害に至ります。このイエスの死(十字架の死)には、このような人間ドラマを超えた「人の救いについての神の深い意図」が隠されているのですが、ユダヤ社会という閉鎖集団の中での加害者と被害者という観点からすると、まさに「いじめによる殺人」です。

いじめの問題を考えている私たちに大きな示唆を与えるのが、いじめの中にいるイエスの態度です。もう少し考えましょう:イエスは殺された、と言いました。とは言っても、必死に抗い逃げようとするイエスを押さえつけて磔にして殺したのではなく、イエスは進んで自らの意志で死に赴かれました。と言っても、ヤケクソになったのでもなく、自殺願望があったのでもありません。こここそ、十字架の死による人間の救いというキリスト教の根本点ですが、これを正面から語ることは今日のテーマから少し外れますので、これ以上踏み込みません。

イエスは「理由もなく憎まれ」、死さえ予測される中で、いったい何を考えておられたのでしょうか。いじめの被害者と加害者という目で見てみます:イエスと律法学者・ファリサイ派たちの生きているユダヤ社会、これが彼らの唯一の世界です。その中でイエスは弱者で、指導者たちは善悪という基準に依らないで、自分たちの欲望のままにイエスを攻撃します。イエスは追い詰められます。逃げ場がないという強い閉塞感に陥って、孤独感に苛まれて、絶望して…とは決してなりません。なぜか?イエスは実は私たちの見聞きするいじめの被害者とは違うあるモノを見ておられたからです。先に引用したことば「人々は理由もなく私を憎んだ」の直前でイエスは言っておられる、「(彼らは)その業を見て、私と私の父を憎んでいる。」「わたしの父」とは「天の神」のことで、「その業」とは、さらにその前を読めば分かるように「神と人を愛するようという教えとその実践」です。つまり、イエスはいじめの中で、天の神=この世界を創られた、この世界を超えたところにおられる神を見続けておられた。確かに彼は「ユダヤ社会」という逃れられない閉鎖集団の中で孤独でした。けれども彼は閉塞感・絶望感に蝕まれませんでした。上の世界を見ておられたからです。天の神と生きた人格的交流があったからです。

人が目を水平に向けている限り、そこには人しかいないでしょうし、それが唯一の世界です。私たちは生まれつき、目に見えるこの世界しか世界は存在しないように目を惑わされています。この世界を超えた存在(「神的存在」)についてボンヤリ思うことはありますが、ふつう真剣に考えません。一人

で考えても、決してわからないからです。聖書によって正しく教えられない限り。しかし、上には神がおられます。一足飛びに、この神との生きた交流をしてください(＝キリスト教信仰)とは言いません。しかし、いじめの中にいる人たちに語りかけたいと思います：君は一人きりではない、上から神は見ておられる、決して一人ではない、上に目を向けてください。そのとき、閉塞感に風穴があき、世界が開けます。

祈りましょう — 天の神よ、あなたは上からすべてを見ておられます。いま「いじめ」で苦しんでいる人たちが、この神の目を知って、救いへと足を踏み出すことができるよう、励ましてください。イエス・キリストのみ名にて祈ります。

2016年10月6日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)